

トップ登場

己を知り、計画を立て、そして実行を



厚生労働省健康局水道課長
宮崎 正信 氏

昨年7月に就任して後、兵庫・広島を中心とした豪雨災害、また御嶽山の噴火、長野県の北部地震など、日本全国での相次ぐ天災に対し、陣頭指揮を執って対応された厚生労働省水道課長の宮崎正信氏にご登場いただいた。これまでの経験も踏まえた率直な感想、今後の水行政、銅管について期待することなどをお聞きした。

災害はいつでもやって来る

——昨年7月に現職に就任されましたが、この間を振り返ってもらって感想を。

就任してからこの間、豪雨、噴火、地震など多くの災害に見舞われました。「日本は災害列島」という呼び方がありますが、そういう日本に住んでいるというのは忘れてはいけません。私が前に水道課（平成18～20年）に在籍していたときも、新潟中越沖地震や広島の大井川トンネル崩壊などがありました。災害は忘れた頃にやって来るのではなく、災害はいつでもやって来るという感じです。

しかし、全国で頑張られている水道事業体も住民への断水や給水制限などは避けたいですから、ぎりぎりのところまで頑張ってしまう。そうすると住民の方々には危ないという意識が伝わりにくくなってしまい、逆に問題なのかも知れません。危機を感じなく、安心しきってしまいます。

——事業体は、住民の方へご迷惑はかけないということで頑張っています。

広報活動や緊急の給水栓の訓練など、住民サービスともいえるソフト面については力を入れており、とても良いことと思います。しかし一方で、更新などのハードの整備は大事なもののなかかなかできていないと言いたいところも少なくありません。ハードとソフトの両方、つまり両輪でやらなくてはいけないと思います。

まずは自らの状況を知る

——市長選挙などで水道料金を下げるという公約がありますよね。

将来も住民の方へ水道サービスを続けられるように、もっと関心を持ってもらえるようにしてほしいです。ただ「蛇口を捻れば水が出てくるからいい」というような意識では今の水道サービスを維持できない可能性があります。周りの人と手を携えてというか助け合っていくしかないと思っています。それが嫌ならば自分で将来のビジョンを作って、今何をしなくてはいけないのかということを考えた上で投資をするなり料金を上げるなりしないと現在の水道のレベルを維持することさえおぼつきません。それはさておき料金を下げますと言われると、ただ単に投資を先送りしているだけです。将来の世代に対してわれわれが責任を果たしていないという気がします。

——講演会で説明もされていますね。

私がよく講演で説明するときに管路更新率

(%)というものを 사용합니다。自治体の持つ管路の総延長で更新された管路延長を割ったものです。全国で見ますと10年位は悪化の一途で、平成13年に全国平均で1.54%あったものが、平成25年には0.79まで落ち込んでいます。都道府県で見ますと東京都が2%を唯一超えていますけれども、そのほかの道府県では0.4~1.2程度となっております。講演では「これはひどい状況です。30年経てば老朽管が半分以上超えてしまってくる未来が見えている。どこかの途上国の話ではない」と言っているのですが、聴講者はまだ実感がわかないといった顔をしている人が多いのです。もっと問題なのはそういう講習会にも来ない水道関係者たちなのですが。

——もっと当事者意識をもって深刻にならなければいけない問題ですね。

もう昔のように国がああしろ、こうしろと指導する時代ではありません。最新技術の紹介や、手引きの作成・紹介などは言えても、それらをもとに考え、行動するのはそれぞれ自分たちでしかありません。昔は全国的に指示を出すといった「コマンド・アンド・コントロール」だったのですが、今では「プレッジ・アンド・レビュー」だと思います。自分たちで考え、いろいろと実施していく。レビューしていった、PDCAサイクルではないですけども、そういう時代が変わっているのです。時代が変わっているにも関わらず、国から何か言われなければ動かないとか、言われていないから大丈夫ですという自分の責任を果たしていない事業体も相変わらずあります。

まず自らの状況を知るところから始めてほしいのです。それがアセットマネジメントだと思うのです。まず現状を知ったうえで将来の水道、例えば

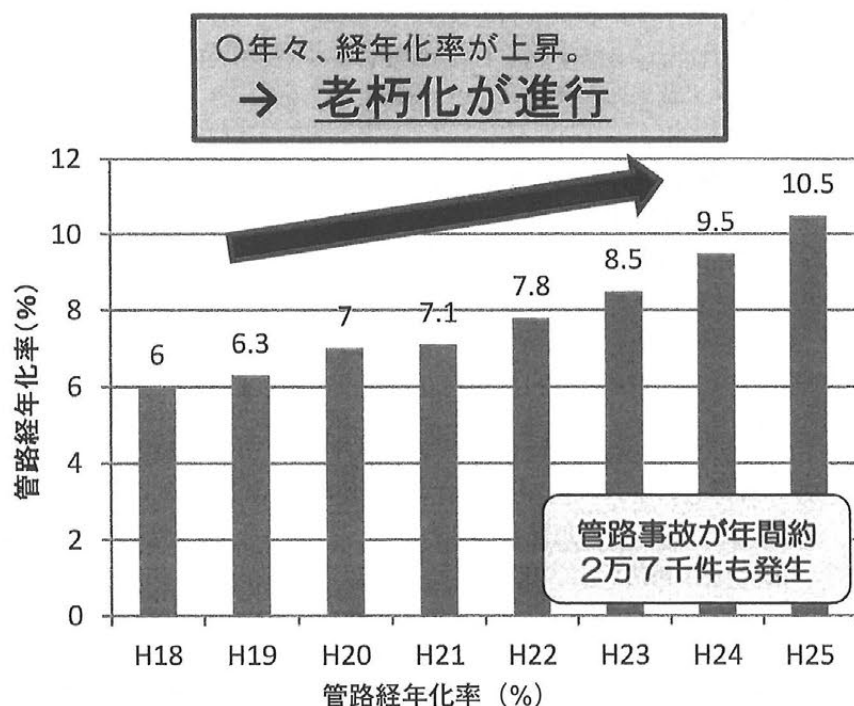
宮崎 正信(みやざき まさのぶ)氏のプロフィール

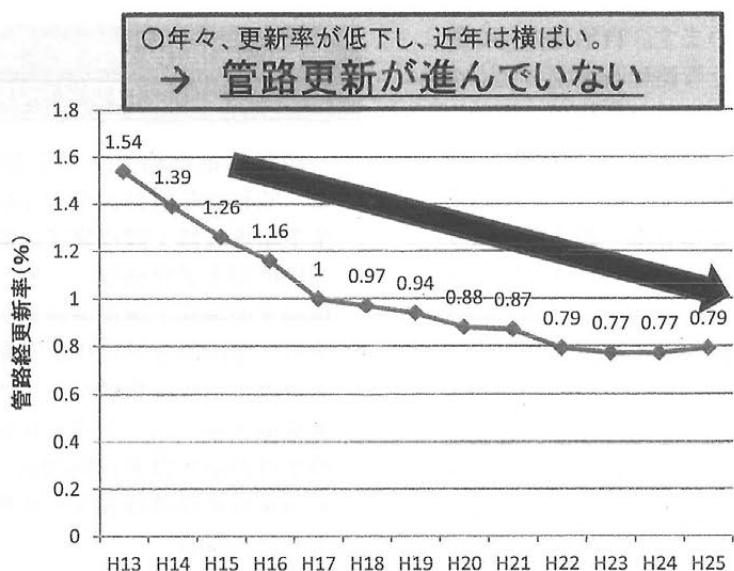
昭和56年京都大学工学部衛生工学科卒業。昭和58年京都大学大学院工学研究科衛生工学専攻修士課程修了。同年に厚生省水道環境部水道整備課に入省。環境省環境管理局水環境部土壌環境課地下水・地盤環境室長、富山県生活環境部参事、厚生労働省水道課水道計画指導室長、水資源機構管理事業部次長、国土交通省水管理・国土保全局水資源部水資源計画課長、環境省水・大気環境局水環境課長などを経て、平成26年7月から現職。

趣味はとお伺いすると「特にないけど、長距離通勤者なので、地元図書館の新刊コーナーにある本を借りて、2日間1冊ペースで読んでいる」とのことでした。

昭和33年8月生まれの56歳。大阪府出身。

50年先にどんな水道が必要かを考えるのです。そのためにどういう施設が必要であって、今からどこを更新していくのか、あるいはダウンサイジングが必要なのかということを、まずは考えて欲しいわけです。





○H25年度の管路更新率0.79%から単純に計算すると、
全ての管路を更新するのに約130年かかると想定される。

管路更新率 (%)

出典：水道統計

アセットマネジメントの簡易ツールなども提供していますし、講習会なども全県でやりました。結果、アセットマネジメントをやっていますよというパーセンテージが上り、それなりの成果が上がったと思いますが、問題は「アセットマネジメントはできました」で終わってしまったらだめなのです。そのアセットマネジメントを使用して予算や更新計画を変えた、見直したと言って欲しいのです。そして耐震計画や水道ビジョン・将来の事業計画など、行動に移してほしいのです。

——現実には耐震化が進まないのなら、まずは目標をつくって行動ですね。

国土強靱化計画など、様々なところに水道の話も出てきています。基幹施設への耐震化率を上げていくという目標は出ているのですが、予算も厳しくなって、停滞している現状もあります。しかしいつでも地震が起こりえることを常に考えてほしい。耐震化に取り組んでいるところと取り組んでいないところでは、差が出てきていることを、皆さんに理解してもらいたいです。国の補助金が少なくなってしまったことを嘆くのではなく、投資水準の低下により施設の経年化率が年々上昇していることに、もっと自覚と危機感を持ってほしいです。

鋼管で耐震化率の向上を

——最後に私たち協会が携わる鋼管に対して、期待や思いなど、ございましたら。

100年水道用鋼管の長寿命技術を開発され、JIS規格やJWWA規格に反映されたことをアピールされていますね。非開削更新工法として、大口径についてはパイプ・イン・パイプ工法、さらに鉄道や河川の下を施工するといった中小口径管のSDF工法、また災害時にも機能する緊急貯水槽や鋼製配水池、断層用鋼管なども備えるなど、こういう技術開発が進んでいるというのは非常にありがたいと思います。鋼管は溶接で一体構造管路が形成されていますので、耐震性能という点からは非常に素晴らしいと思います。これからも、鋼管の良さをアピールして、まだ、あまり敷設されていない、耐震化率の低いようなところを努力していただければ、日本全体の耐震化率の向上にもつながると思います。結局、良い物を使って住民の人が幸せになれば、とても素敵なことだと思います。ぜひ努力してください。

——ありがとうございました。

(聞き手：野口芳男専務理事、4月7日収録)